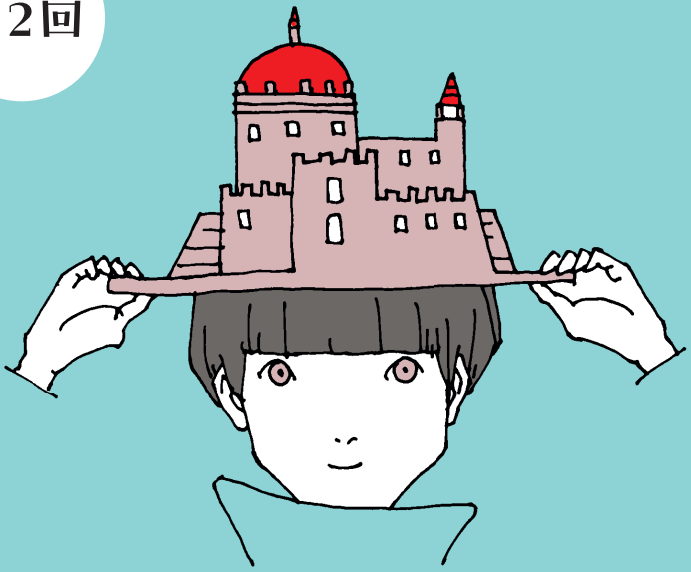
第2回



10代がえらぶ 海外文学大賞

10代がえらぶ海外文学大賞

10代のみなさんにもっと海外文学を！
だって、面白い作品がたくさんあるから！

そんな思いから生まれた文学大賞です。

対象になるのは、前年（2025年）に刊行された10代が主人公の海外文学。その条件を満たしていれば、小説はもちろん、漫画（グラフィックノベル）も、絵本も、詩集も、入ります。

今回は第２回目。４月に幅広い世代のみなさまからの**一次投票**を募り、票の多かった16冊を選びました。それに６名の選考委員が無記名で推薦した６冊をあわせ、全22冊から、10代のみなさんに特におすすめしたい７冊がノミネートされました。

二次投票の主役は、10代のみなさんです。次のページにあるQRコードから、ぜひ投票フォームにアクセスしてみてください。７冊のノミネート作品のうち、１冊でも読んで、それが面白かったら投票ＯＫ。なにか一言書きたい方には、なんでも書きこめる欄を設けています。

この小冊子には、全22冊の紹介文が載っています。書いたのは、作品を翻訳した翻訳者の方々。ぜひ参考にしてください。

みなさんの投票をお待ちしています！

10代がえらぶ海外文学大賞

第二次投票
ノミネート7作品

第一次投票選考委員（五十音順）

越前敏弥（文芸翻訳者）
金原瑞人（翻訳家・法政大学名誉教授）
河出真美（書評・ZINE制作）
三辺律子（翻訳家）
奈倉有里（ロシア文学翻訳家）
鳴川浩子（玉川聖学院中等部・高等部司書教諭）

投票はこちらから

投票期間：７月１日（水）〜10月12日（月）

第二次投票
ノミネート作品

『FREE
歴史の終わりで大人になる』

レア・イピ 作
山田文 訳
勁草書房

「人間はみずからの自由な意志で歴史をつくるわけではない。だが、それでもやはり歴史をつくる」この本の冒頭にかかげられたローザ・ルクセンブルクのことばです。国、町、学校、職場、家族、友だち関係、どのような環境にいても、わたしたちはいつも何かに縛られています――ときには無意識のうちに、ときには耐えがたい苦しみをともなって。あなたがいま、そうした縛りのなかで息苦しさや無力感を覚えていたら、この本をひらいてみてください。1980年代から90年代の激動のアルバニアで過ごした少女レアとその祖母ニニ、父ザフォ、母ドリに出会ってください。絶望しないでください。わたしたちは、それでもやはり歴史をつくるのですから。（山田文）

第二次投票
ノミネート作品

『あいだのわたしたち』

ユリア・ラビノヴィチ 作
細井直子 訳
岩波書店

「ガイジンは出ていけ！」一戦争で故郷を追われた15歳の少女マディーナ。新しい言葉を覚え、苦労の末に在留許可を得て難民収容施設から親友の家へ引っ越した。クラスの輪にも馴染んできて、やっと自分もこの国の一員になれたと感じた矢先、広場で目にした心ない落書きに大きな衝撃を受ける。排外的なデモが毎週繰り返され、参加者の数は次第にふくれあがり、村は大きく二分される。マディーナは思い出す。かつて故郷でも、小さな反目がやがて大きな戦争へエスカレートしていったことを。外国人―自分と違うだれか―への差別とどう向き合うか。見て見ぬふりをするのか、正面から立ち向かうのか。大人も子どもも、私たち一人一人が態度を問われる。（細井直子）

第二次投票
ノミネート作品

『こうしてぼくはスパイになった』

デボラ・ホプキンソン 作
服部京子 訳
東京創元社

第二次世界大戦下の一九四四年、ロンドンではナチス・ドイツによる空襲がつづいていた。二月のある日、十三歳のバーティは民間防衛隊の伝令係としてのはじめての任務につき、そのおりに一冊のノートを拾う。ノートには連合国の秘密諜報員になるための訓練の模様と、読解不能の暗号文が記されていた。バーティに加え、アメリカ人少女のエレノア、シャーロック・ホームズの大ファンのデイヴィッド、それとバーティの愛犬リトル・ルーが、ノートの暗号解読に挑み、行方不明になっているフランス人女性を探しはじめる。三人プラス一匹の少年少女探偵団の活躍を描く冒険小説であるとともに、戦争の悲劇や愚かさを描く歴史小説でもあります。（服部京子）

第二次投票
ノミネート作品

『さあ目をとじて、かわいい子』

サリー・ニコルズ 作
杉本詠美 訳
偕成社

オリヴィアは５歳で実母の虐待から保護され、以来、養護施設や里親家庭、養家を転々としてきた。気分屋で嘘つき、激しやすく暴力的なほか、さまざまな問題を抱えている。16番目の家となったのはいわくつきの古い屋敷で、音やにおいに敏感なオリヴィアは、初日からそこに不気味な気配を感じた。
里親家族への愛着が深まるにつれ、この家からも追い出されるのではという不安に苦しむオリヴィアを、得体の知れぬ影が追いつめていく。その現在進行形の物語のあいまに、これまでオリヴィアが暮らした15の家でのできごとが、過去にさかのぼりながらひとつひとつ語られる。ホラー仕立ての物語からほとばしるのは、くるおしいほどの悲しみと渇望。（杉本詠美）

第二次投票
ノミネート作品

『そして砂漠は消える』

マリー・パヴレンコ 作
河野万里子 訳
静山社

文明が一度滅びて、砂漠化してしまった未来の世界――それがこの物語の舞台だ。木材は貴重品となり、砂漠の「ハンター」たちが木の「狩り」をして売ることで、部族の人々の命と暮しを支えている。12歳のサマァはそんなハンターにあこがれて、「男の仕事だ」と言われてもあきらめずに訓練や準備を重ね、こっそり狩りについていく。ところが途中ではぐれて、獣や砂嵐と闘ううちに……。手に汗握る冒険が繰り広げられ、一人の少女の胸を打つ成長が描かれ、背景には詩のような生命讃歌がきらめく。読み終わると、窓の外の緑がこれまでになくまぶしくて、世界がちょっと変わって見える。地球環境問題が深刻化する今、ぜひページをめくってほしい。（河野万里子）

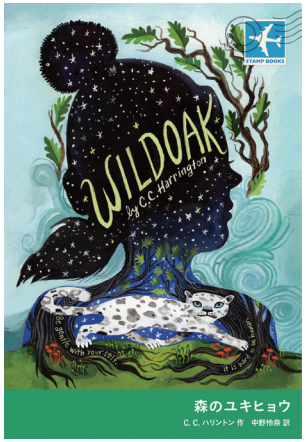
第二次投票
ノミネート作品

『トビウオの声を聞いた日
ギリシャの海とエレナの秘密』

マイケル・モーパーゴ 作
佐藤見果夢 訳
評論社

少女ナンディの物語です。小さい頃からお話を読み聞かせてくれたり、ギリシャの歌やダンスを教えてくれたエリーおばちゃんから、もう歳だから遊びに行けないと手紙がきました。悲しい思いで水辺を歩きまわるナンディの目の前で1匹のトビウオが水面を飛びます。それが、ナンディの旅の始まりでした。ナンディはその日から何年もかけてギリシャ語を学び、アルバイトでお金を貯めました。そして、リュックを背負い、一人ではるばるギリシャのイサカ島へとおばちゃんに会いに出かけたのです。ところが着いてみると家に人の気配がありません。絶望するナンディ。やがて、島の人々、そしてトビウオから、思いがけないおばちゃんの秘密を聞くことになります。（佐藤見果夢）

第二次投票
ノミネート作品



『森のユキヒョウ』

C.C. ハリントン 作
中野怜奈 訳
岩波書店

主人公マギーには吃音があるのですが、父親は従軍時のトラウマから厳しく接し、マギーは周囲の無理解によって自傷行為におよぶほど追いつめられ、自分の声は聞いてもらえないとあきらめています。しかしユキヒョウ（ふわふわで美しい！）の子ランパスと出会い、おじいちゃん（ユニークな発明家！）に支えられ、ランパスと森を守るため声をあげます。吃音はなくても、思いをうまく言葉にできなかったり、それで誤解を招いてしまったりした経験は、だれにもあるのではないでしょうか。シュナイダー・ファミリーブック賞受賞作。植物も動物もそれぞれのやり方でコミュニケーションをとっていると知れば、みなさんもきっと世界の見方が変わるはず。　（中野怜奈）

そのほか、第一次投票で選ばれた15作品をご紹介します。

2026年４月１日（水）～４月15日（水）におこなった
第２回「10代がえらぶ海外文学大賞」の一次投票では、
たくさんの方に投票していただきました。
票の多かった16作と６名の選考委員の推薦書６作をあわせた22作のうち、
ノミネート作品以外の15作品をご紹介します。

『男の皮の物語』

ユベール 作
ザンジム 絵
井田海帆 訳
サウザンブックス社

フランスで生まれたこのバンド・デシネ（マンガ）の舞台は、今よりもずっと男らしさや女らしさのルールが厳格だった時代のイタリア。親が決めた結婚に疑問を抱くビアンカは、着ると男になれる「男の皮」を手に入れ、青年ロレンツォとして婚約者に近づきます。すると、実はゲイだった婚約者がロレンツォに恋をして、２人は奇妙な三角関係に突入してしまうのです。ビアンカはそこから、男の皮を着たり脱いだりしながら、理不尽な世の中で自らの人生をつかみ取ろうとドタバタ劇を繰り広げますが……。洗練された絵柄と奇想天外な設定の中に、誰もが自分らしく生き、互いを尊重し合えるようにという作者らの願いが込められた、愛と寛容の物語です。

（井田海帆）

『崖の上のヒバリたち』

シヴォーン・ダウド 作
エマ・ショード 絵
宮坂宏美 訳

東京創元社

ジムは、トレーラーハウスで両親や親族と移動生活をする少年。アイルランドの小さな集落の学校に通いはじめるが、いつもどおり厄介者扱いされ、不良たちと喧嘩に明け暮れる。しかし、学校で浮いている存在だった少女キットだけは、ジムに好意的に話しかけてきた。やがてふたりは距離を縮め、キットがこっそりジムに文字を教えるまでになったが、あるときジムの病弱な従弟が不良たちに襲われてしまい……。アウトサイダーの少年少女の切ない恋物語を通し、差別、教育、貧困などの問題に一石を投じた作品。カーネギー賞受賞作家シヴォーン・ダウドの最初期の短編のみずみずしさと、新進気鋭の画家エマ・ショードの繊細かつ力強い挿絵が光る。

（宮坂宏美）

『サヨナラは言わない』

アントニオ・カルモア 作
加藤かおり 訳

小学館

主人公のエリーズは、十二歳の女の子。日本人のお母さんを亡くし、フランス人のお父さんとフランスで暮らしている。お父さんは死んだ妻の思い出を消し去ろうと、いろいろな決まりをつくった。日本語を話してはいけない、日本のアニメをみてはいけない、おたがいを前にしてママのことで泣いてはいけない……。エリーズは毎日ジグソーパズルを組み立てながら、悲しみをまぎらわせるしかない。けれども、ちょっぴり変わり者のステラと友だちになり、日本からお祖母ちゃんが乗りこんできたことで、さびしかった暮らしが変わっていく。死別の悲しみをどう乗り越えるのか。深刻なテーマを、ユーモアを交えて軽やかに描いた心あたたまる一冊。

（加藤かおり）

『クローバー』

ナ・ヘリム 作
キム・キョンスク 訳

講談社

おばあちゃんと暮らす韓国の中学生ジョンインは修学旅行の費用を出すことができません。破れた運動靴を気にしながら古紙を拾い、アルバイトをして「食べる分」で精一杯。そんな折、黒猫に扮した悪魔ヘレルと出会います。諦めた「欲」を湛えた魂は悪魔の極上のご馳走。ナイキや高級品、あらゆる「もしも」を差出して言葉巧みに誘惑します。悪魔と少年のウィットに富んだ会話は実にユーモラス。理不尽に心が折れそうになっても、「もしも」を何度繰り返しても、ジョンインが失いたくなかったもの――。格差の陰に隠れる子どもの痛みと尊厳に光を当てた、悪魔と少年の1週間の物語。散りばめられた名言名作は、うつむく瞳を広い世界に引き寄せます。

（キム・キョンスク）

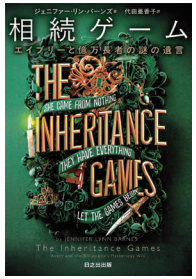
『シリアの秘密の図書館』

ワファー・タルノーフスカ 作
ヴァリ・ミンツィ 絵
原田勝 訳

くもん出版

シリアでは、2011年のアラブの春以降、民主化勢力と独裁的なアサド政権とのあいだで内戦状態が続いていました。抵抗運動の拠点だった町ダラヤは、2012年から4年間、政府軍に包囲され、破壊されていきます。そんな中、若者たちが、破壊された家々から本を集め、建物の地下に図書館を開設しました。
本書はその出来事を下敷きに、主人公の女の子ヌールと、いとこの男の子アミールが、図書館を作る様子を描いた絵本。命の危険にさらされている時でも、本や読書が人間にとっていかに大切なものかを描いています。淡いブルーとレンガ色の組合せが印象的なこの美しい絵本は、アラブ系の作者とユダヤ人画家の合作。巻末の解説も充実しています。

（原田勝）



『相続ゲーム
エイブリーと
億万長者の謎の遺言』
ジェニファー・リン・
バーンズ 作
代田亜香子 訳
日之出出版（発行）
マガジンハウス（発売）

七兆円の遺産をあげます、といきなりいわれた女子高生が向かった大豪邸で待っていたのは才能あふれるイケメン四兄弟。シンデレラストーリーかと思いきや、敵か味方かわからないクセの強い遺族に囲まれて命を狙われたりマスコミに追われたり、次々と難題が降りかかってきます。主人公は知力と想像力で大富豪の遺言の謎を解きながら、富をもつ者としての「長い目で見た責任」を学びます。
ミステリーとロマンスとセレブ気分と海外文学らしさが絶妙に配合されて、長編ながらジェットコースターのようにあっという間に読み切ってしまう作品です。三部作で、二巻はスリルとアクション、三巻は心理戦が加わってさらにハラハラドキドキの展開です。
（代田亜香子）

『チーム・テスなら
だいじょうぶ』
カービー・ラーソン ＆
クイン・ワイアット 作
杉田七重 訳
鈴木出版

転校先になじめずに暗い毎日を送っていたテスは、手作りスイーツをきっかけに親友ができ、お菓子作りのコンテスト、ベイク・オフへの出場を決める。男子も加わって優勝を目指すチーム・テスが結成されると、そこから先はまさに青春ドラマの熱い日々。
ところが、そんな矢先に、以前から苦しんでいた激しい腹痛に難病の診断が下される。ベイク・オフの出場どころか、人生もあきらめろというのか？　絶望の淵に落とされたテスに、仲間たちが手を差し伸べる。いっしょに泣いて、笑って、闘う。最高にかっこいい中２のリアル。10代のときにこの本と出会えた幸せを噛みしめながら、とっておきのスイーツを味わうように読書の醍醐味を堪能してほしい。
（杉田七重）

『それからぼくは
ひとりで歩く』
アリシア・モリーナ 作
犬吠徒歩 絵
星野由美 訳
ほるぷ出版

ハイメは目の見えない11歳の男の子。手で感じ、耳で聞き、においをかぎながら、工夫を重ね毎日を過ごしています。クラスで視覚障害があるのは彼ひとりですが、友だちもでき、学校生活を楽しんでいます。ある日、好きな女の子パウリーナを家まで送ろうとしたことから、思いがけずひとりでバスに乗って帰ることに。こうして、ささやかで大きな冒険が始まります。ハイメの姿は、あなたが初めてひとりでバスに乗った日や、自転車に乗れたあの瞬間と重なるかもしれません。「視覚障害のある人もない人も、ハイメの勇気と決断に共感してもらえたら嬉しい」。作者アリシアさんの言葉とともに、あなたの「はじめて」に寄り添ってくれる一冊になりますように。
（星野由美）

『バベル
オックスフォード
翻訳家革命秘史』(上・下)
R・F・クァン 作
古沢嘉通 訳
東京創元社

翻訳行為により魔法的な力を発揮する「銀」をもって世界の覇権を握る十九世紀前半の英国で、その中心となるオックスフォード大学の王立翻訳研究所「バベル」を舞台に、中国生まれの孤児だった主人公ロビン・スウィフトたち四人の学生の凄絶な青春を描いたファンタジー大作。本書の読みどころは、若い主人公たちが送る濃厚な学生生活の描写です。高い要求水準の学業に必死で食らいつきつつ、社会の現実に目覚めていく若者の姿はきっと読者の共感を呼ぶことでしょう。
ネビュラ賞・ローカス賞受賞。邦訳版は早川書房主催のBEST SFアンケートで二〇二五年海外篇第一位に輝き、本年度星雲賞海外長編部門を受賞しました。
（古沢嘉通）

『ビスケット』

キム・ソンミ 作

矢島暁子 訳

飛鳥新社

ビスケット。いじめや無視、虐待などで存在感を失い、見えなくなってしまった人たち。誰からも相手にされず、かすかな音や気配だけを残してひっそりと息を潜めている。聴覚が過敏で病院に入退院を繰り返している高校生ジェソンは、鋭い聴覚で他の人にはわからないビスケットの存在に気付くことができる。ビスケットを見つけ、彼らを助けるのが自分の使命だと考えているのだ。ある日ジェソンは、虐待を受けている女の子を見つけるが、助けに向かう前に再び病院に放り込まれてしまう。なんとか病院を脱出し、幼なじみ三人組で手に汗にぎる救出劇を繰り広げる……。存在感と自尊心。この古くて新しいテーマに、ファンタジーという形で向き合わせてくれる一冊。

（矢島暁子）

『ペンツベルクの夜』

キルステン・ボイエ 作

木本栄 訳

静山社

1945年4月末、ナチス・ドイツの終焉間近。南ドイツの小さな炭鉱町で一夜にして16人の無抵抗な市民がナチスの「正義」の名のもとに処刑された。本書は、ドイツでもあまり語られてこなかったこの事件を、犠牲者・加害者それぞれに近い立場の架空の三人 ― 14歳のマリーと15歳のゲオルクとグストル ― の視点から描く。目の前で繰り広げられる展開に茫然とするうちに事態が暴走し、取り返しのつかない結末へ突き進む恐ろしさと無力感。犠牲者たちの慰霊碑には「彼らの死は、我々への戒めである」とあるが、狂気の暴走はいつの時代でも起こり得る。史実を丹念に調べた作者ボイエがあとがきで明かす加害者たちのその後も衝撃的だ。

（木本栄）

『屋根の上のソフィー』

キャサリン・ランデル 作

佐藤志敦 訳

岩波書店

19世紀末の英仏海峡。難破船のそばをチェロのケースに乗って漂っていた赤ん坊ソフィーは、チャールズに救われロンドンで成長する。ある日、二人のもとに児童養護施設への入所通知が届き、ソフィーが怒りにまかせてチェロのケースを壊すと、中からパリの住所が刻まれた真鍮板が……。そこに母の手がかりがあると考えた二人はパリへ向かう。そこでソフィーに力を貸すのは、屋根の上で暮らす子どもたち。夜空を駆け抜ける冒険がはじまる。子どもがもつ可能性、そして愛と勇気と音楽に満ちた物語は、仏ソルシエール賞ほか受賞、ガーディアン賞、カーネギー賞最終候補。ファベルジェの卵のようなパリの夜の綱渡りシーンもお見逃しなく！

（佐藤志敦）

『夜明けまでに誰かが』

ホリー・ジャクソン 作

服部京子 訳

東京創元社

高校生のレッドは三人の友人たちと大学生二人の計六名でキャンピングカーでの春休みの旅行に出かけた。午後十時、人里離れた場所で何者かにタイヤと燃料タンクを撃ち抜かれ、立ち往生してしまう。携帯の電波も届かぬなか、狙撃者から、六人のうちのひとりが秘密をかかえている、それを明かせ、と命じられる。制限時間は夜明けまで、逃げようとする者は狙撃されるという極限状態のなか、六人は徐々に精神的に追いつめられ、仲間同士の絆がほころびはじめる。狙撃者が要求している秘密は誰のもので、どんな内容なのか。そして狙撃者の目的は？　キャンピングカーを舞台に、夜明けまでの狂気の数時間を描く、予測不能のサスペンス。

（服部京子）

『ヨークシャーの丘の幽霊』

マーカス・セジウィック 作
野沢佳織 訳
徳間書店

緑の丘にぽつんとたたずむ少年、ジェイミー。家族４人で旅行にきたのに、みんなの心はばらばら。とくに、仲のよかった兄のロビーが口をきいてくれず、傷ついています。そんなとき、目の前に現れたふしぎな少女から、「ついてきて。男の子を助けてあげて」といわれ、思わずついていくと!?　物語の中ごろに、かなり怖い場面があります。でも、最後まで読めばきっと、読んでよかったと思えるし、怖い夢を見ることもないはず。作者のセジウィックは、過去と現在、夢と現実を自在に行き来しながら、豊かな想像力で読者を物語にひきこみ、読む前とは少しだけちがうところへつれていってくれます。そんな彼の遺作となった作品。ぜひ、味わってみてください。

（野沢佳織）

『ランドリーの迷子たち』

シャネル・ミラー 作
ないとうふみこ 訳
ほるぷ出版

マグノリアはニューヨークのコインランドリー店の子。両親が忙しくて、夏休みでもどこへも行けません。でもマグノリアが拾い集めてコルクボードに貼っていた迷子のくつしたを見て、友達のアイリスが「くつしたの持ち主をさがそう！」と言い出します。ふたりのささやかで驚きに満ちた小さな冒険が始まります。歩きまわって近所の人たちから話をきくうちに、マグノリアは、よく知っていると思いこんでいた親や、いとこや、クラスメートたちの知られざる１面に出会っていきます。そしてアイリスの抱えているつらさにも……。ユーモアたっぷりに語られる小さな冒険談を読みすすめるうちに、意外な深さがしみてくる物語。小中高生みんなにおすすめです。

（ないとうふみこ）

第一次投票選考委員より

戦争をしてはいけないとか、人を差別してはいけないとか、当然のこと、わざわざ言うまでもないはずのことを言わなくてはならない時代になっています。今回選ばれた作品はどれも、それらのメッセージをしっかり伝えたうえで、人生をさらに豊かにしてくれるものばかりです。ぜひ１冊でも多く読んでください。（越前敏弥）

なぜか、こういうところに文章を書くのが苦手になってしまった。どれもいい本ばかりだから、１冊でいいから読んでみて！　これくらいかなあ、いいたいことは。（金原瑞人）

推薦作品を選ぶために読んだ本がみんな面白くて困ってしまった。本当にこの中からたった一冊を選ぶなんてできるだろうかと思うほど。悩みに悩み、どうにか一冊を選んだ。10代が主人公の海外文学、本当に粒ぞろいなんです。この小冊子に載っている本も、載っていない本も、ぜひ読んでみてください。（河出真美）

本は一人で読むのも楽しいし、クラスメイトでも友だちでも家族でも、だれかと同じ本を読んで、ああでもないこうでもないと感想を言い合うのも、また楽しいと思います。そんなふうに、この賞を目いっぱい利用してもらえたらうれしい！（三辺律子）

難しいように思えることも、こんな主人公たちと一緒なら考えていける。病気、喪失、環境問題――身近なことから世界のことまで、さまざまな問題に直面しながら生きている10代の主人公たちに励まされる本がたくさん。心に残る作品ばかりです。（奈倉有里）

今回も色々な国、時間が舞台の物語がたくさん！　読んでいる間は、世界中を時間も空間も超えて旅している気分で、楽しかったです。他にもたくさんおもしろい作品があって、読みたい本はいつも山積み！幸せ！　皆さんも一緒に、海外小説から、時間も空間も超えて世界中を旅しませんか。（鳴川浩子）

読書が一生の友だちになるよう、応援しています

東証プライム（サービス:4714）
リソー教育グループ

The safe route is boring.
We explore the frontier, even if it takes longer.
Even if it's tougher.
Attack.

K2 PICTURES

面白いって思ったら、それが正解！

光村図書

10代がえらぶ海外文学大賞

主催：一般社団法人青少年読書推進機構

X：10daikaigaibk　Instagram：10daikaigaibungaku

一般社団法人青少年読書推進機構は
「10代がえらぶ海外文学大賞」のために設立された社団法人です。
お問い合わせは10daikaigaibungaku@gmail.comまでお願いします。